

書評

和田琢磨著 『『太平記』生成と表現世界』

佐倉 由泰

『太平記』は「歴史」というものの観念を一変させた。『太平記』に先行する歴史叙述は、虚構、脚色、省筆等を行いながらも、完了した事実を容認し、それを「歴史」として記した。その枠組みの中で「歴史」の理法を見出し、編み出した。ところが、『太平記』は、完了した事実を受け入れずに理法を提示することで、可能性であり続けること、あるべきことまでもが「歴史」となり、「歴史」を「歴史」たらしめる意味づけが後世に持ち越された。過去に拘束されない「歴史」が誕生したのだ。日本文化史に画期をもたらす事件であった。

『太平記』の重要性和難解さの根幹はここにある。『太平記』には、完了した事実を「歴史」として受け入れる構築性と、その営みを放擲する脱構築性とがせめぎ合う。記述は、明確な理念を提示しながら、その実現が見込めない状況で迷走し、表現は過剰性を帯び、論理は反転を重ね、内容は多元化し交錯している。しかも、文体、用字、用語は、多様なリテラシーを驚くほど広範に深く巧緻に織り込んだものであり、その点でも読解は容易ではない。

このような『太平記』を読み解く鍵になるのが生成の問題である。『太平記』は、いつどの段階で、どこまで意図的に、どこま

で偶発的に、重要で難解で特異な歴史叙述となったのか。実証は不可能でも論証を要する『太平記』研究の最大の課題だ。これに真正面から取り組んだのが、和田琢磨氏の著書『『太平記』生成と表現世界』である。書名のとおり『太平記』の生成の問題を考究の基軸に据え、幅広く周到な論述を展開することで、成立論としても、諸本論としても、作品論としても、享受史論としてもすぐれた一書となっている。表現世界の脱構築性も視野に収めた柔軟な展望を具えながら、記述の構築的生成過程を丹念に跡づけようとしている。多大な困難を伴う考究であるが、和田氏は、遠大な高みに向かって、着実に丁寧に論証を重ねている。本書はそうした得難い思考の結晶であり、『太平記』研究の画期をなす、待望の名著である。

総頁は五一〇頁に及ぶ。本論部は二部五章十九節と一つの付論から成り、各節と付論を一篇と見ると、二十篇の論考を収載していることになる。本論の前に、序論「研究史概観と問題の所在」が配されているが、その記述も貴重である。『太平記』の研究史が、「作者」、「成立年代」、「諸本」、「構成」、「序」をめぐって、「史実との関係」、「平家物語」の表現との関係、「享受」の八項目に分かれて、丁寧に詳述されている。『太平記』研究の道標、手引きとしてもきわめて有意義である。和田氏の研究上の関心の高さ、思考の深さが如実に現れている。記述への細心の注意もうかがわれる。たとえば、三〇頁では、其角の句「平家也太平記には月も見ず」を挙げ、『五元集』(「宝井其角全集 編著篇」勉誠社、一九九四年)と、典拠を明示しているが、それは些細なことに

見えて、なかなかできることではない。出典を知り、それに当たれることを確かなものにしていく。こうした細やかな配慮が序論に始まり、本書の全編に溢れる。論述上の「問題の所在」を示す記述も、序論に限らず、五つの章の各冒頭に配されている。論旨の要説も、本論の後の「結論」部だけでなく、各章の結尾の「結び」でも明快になされており、全編の大尾には英文の要旨もある。このように、本書には懇切な心配りが幾重にもめぐらされている。

本論の第一部「生成と歴史叙述」は二章から成る。第一章「初期足利政権と『太平記』の生成」では、まず、今川了俊の『難太平記』の、足利直義、恵鎮、玄恵が登場する記述に注目する。それは『太平記』の生成を考える上で最重要の記述であり、実に自然で理にかなった本論の始め方である。第一節「『太平記』の作者説をめぐる諸問題——『難太平記』研究史の検証——」では、この『難太平記』の記述を丁寧に読み解きつつ、従来の『太平記』の作者説を精緻に検証する。その中でも、特に、玄恵の『太平記』の生成への関与について、慎重に留保を示していることが注目される。第二節「今川了俊の『太平記』の「作者」では、『難太平記』の全編の記述の意図を詳しく考察した上で、了俊が『太平記』を足利將軍家の公的な史書と捉え、恵鎮とその周辺の人物を作者と見ていたと論じている。『難太平記』の専論としてもたいへん有意義である。第三節「『太平記』世界の変貌」では、直義の管理下で構想された『太平記』の初期形態を想定すべく、同じく初期足利政権の意向を強く反映して成立したとおぼしき『明德記』の構想を考察し、相国寺供養記事の検討等を通して、『明

徳記』を、足利義満の武家の棟梁としての權威、正当性を標榜する作品と捉え、現存しない『太平記』の初期形態を類推する。ともに初期足利政権の影響下で成立したとしても、リテラシー、文体等に本質的な差異もあるように、成立環境の異なる『太平記』と『明德記』の初期構想を同定化することには当然限界もありそうだが、『太平記』の生成を捉えるためのあるべき作業仮説にもとづく不可欠の試みであることは動かない。第四節「軍記物語の生成と享受——南北朝・室町時代初期の「様相」——」も、『明德記』に着目し、その成立時期を捉える考証を行うとともに、異本生成の実態を捉え、足利政権下での諸本生成の事例として、『太平記』の生成の問題に敷衍し得る可能性を示唆している。前節の考察とともに、『明德記』の専論としても注目すべき論考である。

第一部の第二章「相反する將軍像——尊氏像と義詮像——」は四節から成るが、第一章の初期足利政権下での『太平記』の生成を探るという課題を引き継ぎ、足利將軍の造型を論ずる。第一節「功績者尊氏像の形象法——奏狀の論理をめぐって——」では、巻第十四の、後醍醐天皇への足利尊氏と新田義貞の奏狀を取り上げ、『太平記』が尊氏の武家の棟梁としての資質（威）を強調する正当化を行っていることを指摘する。「威」を作中のキーワードと見る点でも重要な考察である。第二節「武家の棟梁抗争譚創出の理由——新田義貞像の役割——」では、『太平記』が、尊氏と義貞の抗争を際立たせて、後醍醐天皇と尊氏の対立を隠蔽し、義貞の權威を凌ぐ尊氏の權威を表出していると論ずる。以上の二つの節では、『太平記』が、生成の初期から、尊氏を正当化する構想を具

えていたと捉え、義貞をその構想に寄与する存在と見る。義貞の造型にも主体的な意図があるはずだが、それを考える上でも、和田氏の論考に学ぶ必要がある。第三節「將軍義詮像の性格―四〇巻本と足利將軍家との関係―」では、足利義詮の形象に尊氏像のような権威化が見出せないことを指摘し、そこに『太平記』の生成が足利將軍家の管理を離れた事情を推考する。今後、『太平記』の義詮像を考える上でも、『太平記』の初期構想と後次構想との非連続を論ずる上でも規準とすべき論考である。第四節「天皇と將軍／將軍と武將」は、尊氏の造型において、天皇との関係が重要な意味を持つことを指摘する卓論である。天皇を戴かない時の戦いの場面に限って尊氏の「運」が語られることなど、『太平記』の読解を左右する論及も多い。

第一部の第三章「歴史叙述の方法―時代状況との関わりから―」は五節から成るが、『太平記』の全体像を捉えることを意図して本文の生成を論ずる重要な論考が並ぶ。第一節「第一部の構造」は、『太平記』の第一部の討幕の記述に、公家側の視点と武家側の視点が併存し交錯していることを的確に指摘する。統一性が強いとされる第一部で早くも記述の多元化が起っていることが明示されている。第二節「食」の表象―『太平記』の合戦叙述の「特徴」―では、飲食のモチーフが、楠正成の智謀の表象や戦う人々の意志の表現に深く関与していることを論じ、『太平記』の軍記物語としての特質を明らかにしている。第三節「本文改訂の志向―細川清氏失脚記事の検討―」では、巻第三十六の細川清氏失脚記事について、先行形態と目されるB系統本文からA系

統本文への改訂を丹念に考証し、その改訂本文には、京と鎌倉で足利將軍家が危難を迎えていた状況が投影されていると論ずる。第四節「細川頼之の管領就任記事の位置付け」は、議論の多い『太平記』の大尾の意味を考察する。和田氏は、細川頼之の管領就任記事を全編の結尾とする終幕を、唐突であり、理念としての太平の実現にはほど遠いと捉えつつ、天皇―將軍―管領という安定した体制の完成を見抜いた作者の炯眼が現れていると論ずる。多様な理解が成り立ち得るきわめて重要な問題ではあるが、和田氏の見解が今後の議論の基軸となるに違いない。この大尾の考察に続き、第五節「序」の機能」では、儒教的理念を提示している冒頭の序を問題にし、『太平記』が、この世に、理念では捉えきれない不可知の因果があることを認識しつつ、現実にはふみとどまり、政道の行方を捉え続け、記し続ける中で、序の理念は作中の規範であり続け、乱世の理不尽さを映し出す規準ともなっていると指摘している。これも示唆に富む好論である。『太平記』全編の思想を考える上でも大きな拠りどころになる。

『太平記』の生成の問題を享受の問題に結びつけることを意図した、第二部「多様化する表現世界―中世から近世へ―」は二章から成るが、第一章「巻二―「塩冶判官讒死事」の変相」は、「諸本の整理と話型分類（一）」、「諸本の整理と話型分類（二）」、「諸本の独自性と共通性」の全三節で、巻第二十一「塩冶判官讒死事」を考察対象として、諸本間の異同が大きく複雑なその本文を七系統に分類し、各系統の生成上の関係を明らかにし、各本の塩冶高貞一家の悲劇の描き方や、高師直に対する批判のあり方を論述し、

後世の物語における享受の様相にも論及している。諸本論としても、作品論としても、享受史論としても重要な考察である。甲・乙・丙・丁に四分類する、現在の一般的な諸本分類の枠に収まらない本文異同の問題を提示していることや、「塩治判官讒死事」の梵舜本型本文の成立下限を宝徳四年（一四五二）に引き上げて捉えていることなど、論述の各所で注目すべき指摘がなされている。

第二部の第二章「『太平記』を纏う物語―近世初期『太平記』享受の一齣―」では、『獣太平記』と『魚太平記』、『草木太平記』と『諸虫太平記』、『貧人太平記』の三節と付論「『太平記』を纏う物語研究の可能性―『慶安太平記』を軸として―」のタイトルに名の挙がる、近世初期の六編の「太平記」の名を纏う物語について、『太平記』との関係や距離を測りつつ、考察を行っている。それぞれの物語の生成と記述の特質を明示する論述は各作品の専論としての意義を十分に具えている。その上で、これらの物語が「太平記」の名を纏うことの意味が問題になるが、和田氏は、合戦に関する内容を語るところに、各作品の固有の性格を超えた共通点を見出し、「太平記」という言葉を「合戦」の代名詞と捉える。これも、今後の研究の道標となる有意義な見解には違いない。が、歴史叙述の問題を幅広く考究している本書全体ののびやかな展望を延伸すれば、さらに豊かな思考に到り着けそうだ。「太平記」とは、「合戦」というモチーフをも含んだ、より大きな概念としての「歴史」の謂いではないのか。『太平記』は「歴史」というものの観念を一変させた。それは、「歴史」の複数性を現出させたことを意味する。『太平記』の前には、同じ事件を

記しても視点を異にする、複数の「歴史叙述」はあったが、複数の「歴史」はなかった。それが『太平記』の登場により、「歴史」は一つではなくなり、行き着くところ、歴史のパロディも「歴史」となった。「獣」や「魚」や「草木」や「諸虫」の物語も「歴史」であり得る。「太平記」とは、従来の「歴史」とは異なる、新たな「歴史」という意味で盛んに用いられたのではないか。その盛行は、近世に限らず、近代、現代にも及ぶ。「〇〇太平記」の陸続たる登場は、『太平記』の、「歴史」の複数化を促す歴史叙述としての特質に起因する現象であったと考えられる。

以上、和田琢磨氏のこのたびの著書の論述を評してきた。『太平記』の難解さもあつて、その論述をめぐっては多様な異説もあり得よう。現に、第一部第三章第三節「本文改訂の志向―細川清氏失脚記事の検討―」では、A系統本文の細川清氏と佐々木道誉をめぐる記述の解釈に関して、小秋元段氏との見解の相違が重要な論点になっている。容易に結着がつかないということでは、『太平記』の序の理解、結末の捉え方、「北野通夜物語」の解釈等の課題もある。しかしながら、上述のとおり、そうした困難な状況の中でこそ、和田氏が本書で示した考究はより重要度を増して際立つ。間違いない、これからの『太平記』研究の規準として、新たな考究の基点であり続けるはずだ。今は何よりも、『太平記』研究がこのよい著書に恵まれたことを素直に慶びたい。あわせて、和田氏の研究の今後のさらなる深化、進展を確信し、大いに期待している。